

「Z会の映像」 教材見本

こちらの見本は、実際のテキストから1回分を抜き出したものです。

ご受講いただいた際には、郵送にて、冊子をお届けします。
※実際の教材は、問題冊子と解説冊子に分かれています。

教材見本内の「添削課題」は、演習問題として扱っており、
添削指導はおこなっていません。ご了承ください。

次の文章は『源氏物語』の一節で、難を逃れるために須磨下りを決意した光源氏が、源氏の父・桐壺院の没後は妹と暮らしている麗景殿の女御のもとを訪れる場面である。なお、源氏は女御の妹にもかつて会ったことがあり、再会したいとひそかに思っている。これを読んで、後の設問に答えよ。

かの本意の所は、ア 思しやりつるもしるく、人目なく静かにておはする有様を見給ふにも、いとあはれなり。まづ、女御の御方にて、昔の物語など聞え給ふに、夜更けにけり。二十日の月さし出づるほどに、いとど木高き陰ども木暗う見えわたりて、近き橘の薫り懐かしう匂ひて、女御の御けはひ、イ ねびにたれど、あくまで用意あり、あてに、らうたげなり。すぐれて花やかなる御おほえこそなかりしかど、むつまじう懐かしきかたにおぼしたりしものをなど、ウ 思ひ出で聞え給ふにつけても、むかしのことかきつらね思されてうち泣き給ふ。郭公、ありつる垣根のにや、おなじ声にうち鳴く。エ 慕ひ来にけるよとおぼさるるほども、艶なりかし。「いかに知りてか」など、しのびやかにうち誦し給ふ。

オ 「ちちはなの香をなつかしみ時鳥花散る里をたづねてぞ訪ふ

いにしへ忘れがたき慰めには、まづ参り侍りぬべかりけり。こよなうこそ、まぎるることも、数そふことも侍りけ

れ。おほかたの世に従ふものなれば、昔語りも、かきくづすべき人少なうなりゆくを、まして、つれづれも紛れなく思さるらむ」と、きこえ給ふ。みないと殊更なる世なれば、ものをいとあはれに思し続けたる御気色の浅からぬも、人の御様からにや、多くあはれぞ添ひける。

「人目なく荒れたる宿は、たちばなの花こそ軒のつまとなりけれ」

とばかりのたまへる、さはいへど、人にはいと異なりけりと、思しくらべらる。

(源氏物語)

〔注〕 ○いかに知りてか——「古へのこと語らへば時鳥いかに知りてかふる声のする」による。

○たちばなの香を——「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」による。

設問

(一) 傍線部ア・イ・エ・オを現代語に訳せ。

(二) 「思ひ出で聞え給ふ」(傍線部ウ)では、源氏が故桐壺院のことを思い出しているが、故桐壺院のどのような様子を思い出しているのか、わかりやすく説明せよ。

(三) 「たちばなの花こそ軒のつまとなりけれ」(傍線部カ)とは、どういうことを言っているのか、具体的に説明せよ。

(各 14 cm × 1 行)

(14 cm × 1.5 行)

(14 cm × 1 行)

出典：紫式部『源氏物語』「花散里」／ オリジナル問題

現代語訳

その（源氏の会いたいと思っている）お目当ての（麗景殿の女御の妹＝花散里が姉の女御と暮らしている）ところは、（源氏が）御想像になったとおりに、（来訪者の）人影もなくひっそりと暮らしておいでになる有様を（源氏が）御覧になるにつけても、いかにもしみじみとした様子である。（源氏は）まずは女御のお部屋で、昔の（桐壺院御在世のころの）思い出話などを申し上げなさるうちに、夜も更けてしまった。（陰暦四月）二十日の月が昇ってくると、（その光との対比で）ますます、鬱蒼とした木立の陰が一面に暗く（沈んで）見えて、（お部屋の）近くの橘の（花の）香りが、親しみを感ぜさせて漂って（くる。そんなひっそりとした雰囲気の中で見る、女御の御様子は、齡こそ取ってはいるが、これほどまでにと思われるほど挙措態度に心遣いが感じられて、品もあるし、（また同時に）かわいげでもある。（その御様子を見るうちに源氏は、この女御が父の桐壺院から）特に人一倍きらびやかな御寵愛（をこうむること）はなかったとはいえ、（院も）気心が知れて親しみの持てる方だと思っておいでになったのになどと、お思い出し申し上げなさるにつけても、昔の（宮中での）ことが、あとからあとから続いてお心に浮かばないではいらつしやれずに、（源氏も）涙をお催しになる。（そうこうするうちに）ほととぎすが、先ほどの垣根（で鳴いていた）の（と同じ）であろうか、（ここでも）同じ声で鳴いている。（自分の）後を慕ってきたのだなと思わずにはいらつしやれない（この場の）雰囲気も、なんともしつとりした趣があるものだ。「昔話をしている」とどうしてわかったのだろう」などと（源氏は古歌を）低い声でお口ずさみになる。

「たちばなの……（昔のことを思い出させるといふ）橘の（花の）香りが慕わしいので、ほととぎすが（その橘の）花の散るこの昔馴染みのお屋敷を探して訪ねてきました（が、私も同じように女御さまのことが懐かしくてやってまいりまして、こうして御一緒）に昔のことを思い出しています（）」

昔のことが忘れがたい（ために物思いにふけてしまっていますが、その）慰めのためには、何をさておき（こちらへ）お邪魔しなければならぬのでございませうなあ。（こうした思い出話をしていると、そんな物思いの）このうゑなく慰められることも、（またいっそう昔を思い出してかえって物思いが）あらためて募ることもあることとございませう。世間の人は世の流れについてゆくものですから、思い出話も聞いてもらうのにふさわしい人が少なくなつてゆきますが、（父と離れて育つた私でさえ父を亡くしてこんなに悲しいのですから、頼りにする夫としての帝に先立たれていらつしやる女御さまは、私にも）まして所在ない思いの紛れることもないと思わずにはいらつしやれないこととございませう」と、（源氏は女御に）申し上げなされる。何ごとも、たいそう、今さら言うまでもない（はない）世の中だから、（女御もこれまで）何かとそれはしみじみと深く思い続けておいでになる御様子がありありと見受けられるもの、お人柄から（そう感じられるの）だろうか、ますますものあわれが深まる感じのすることである。

「人目なく……人の姿もなく（寂しく）荒れている（私の）住まいは、（昔を思い出させる）橘の花だけが、軒端の目印のようになつて、それがあなたさまをこの住まいに呼び寄せるきつかけとなつ）たのですねえ」

とだけお答えになつた（女御の御様子）は、そうはいいながらも、他の女性よりはいかにも違つて（優れて）いるなあと、（源氏は）お比べにならずにはいらつしやれない。

解答

(一) アⅡ源氏が御想像になつた様子のとおり

イⅡ齡はとつていても、どこまでも心遣いが行き届いて

エⅡ先程の時鳥が、私のことを慕つて追つてきたのだなあ

オⅡ昔を思い出させる橘の花の香りが慕わしいので

(二) 格別の寵愛はなかつたが、麗景殿の女御を気の置けない親しみの感じられる人だと思つていた様子。

(三) 橘に昔を思い出して源氏が女御邸を訪れたということ。